



# 日本語の話

フランス文学を研究し、だんだん独自のフランス語をやっているうちに、私は自分が日本人であるということに気がつきました。日本人だから、どんなにフランス人の真似をしたところで、とてもフランス人になれるはずはありません。

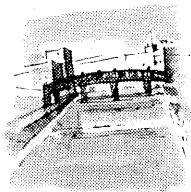
フランスには、コメディイフランセーズで、土曜日に専属の俳優連が入れかわりたちかわりあらわれて、自分の好きな詩を朗読するというのがあります。私もフランスにいた頃はいつも行きましたが、大いに得るところがありました。会場は満員です。そこには生きたフランス語があり、なるほどフランス語というのはこういうものなのかと感銘を受けました。これが病みついて、日本でも詩をよむ、さ

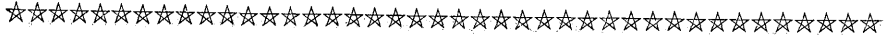
## 内藤 濯

らりと読む必要があるということをしみじみ感じ、帰国してから盛んにやりました。

「星の王子と私」という本を出したとき、私はそれについて何か話をしてくれというNHKからの依頼を受けました。放送するにあたって、まずジェラルド・フィリップという人の大変美しいテープがありますから、それをかけてから先生のお話にうつりたいと担当の人が言いましたから私は一言申しました。

ただ美しいとだけ言うのでは、聴いている人はなぜ美しいのかわかりません。それではまるで子どもみたいな言い方です。ただ美しいと言うだけではなく、なぜ美しいの





かを言わなければ、人は承知しないでしよう。

これは自分の実験から言うのですが、英語やドイツ語などヨーロッパの北の方のことは、とかく子音が多い。そのためしまりがありません、ことばがかたくなります。反対に南の国、スペインとかイタリーとかのことは、母音が多すぎるためしまりがなくなります。さあ、その中間に位置するフランス語というのは、子音と母音のあやどりがまことに良く出来ているということが言えます。これを言わないと、なぜフランス語をやるかという、目的がありません。それに加えてもうひとつ日本語にはないような母音：鼻母音があります。鼻にかけて母音というのはとてもきれいなもので、これが一層フランス語を美しくしているので、これらを言わなければ、美しいということは意味をなさないのでしよう。外国語はただやるものではありません。日本語をよくするという意味で外国語をやる。私はもうそういうときに来ていると思うのです。

私が学生のとくに講義をうけた上田敏先生は、たいそう耳のいい人でした。秋の日のヴィオロンのためいきの…、これは、オー、オー、オーという感じです。我々はふくろ

うの鳴き声をきくとさびしくなりますが、この詩はその効果を出しているのだから、それを生かさなくてはいけないと先生は言われました。ほんとうにその通りですね。

海潮音に「両替橋」という詩が載っていますが、これを訳されるとき先生は原語をそのまま使われました。両替橋という、子音が多すぎてきたない。だから最初からボン・トオ・シアンジュ、花市の晩。風のまにまにふわふわと…とこうでてる。私はポーッとしてしまいました。なかなか良い感覚です。原書を読むときに、ことばを追って読むようなことでは困りますが、先生のはそうではなかったから、私はおもしろくてたまりませんでした。

私は、文学をやらない人がもっていなければならぬ文学が、どうしてもなくてはいけないということに気がつきました。くらしの中にある文学、万人がもたなければならぬ文学、これは文学というより文学以前です。このごろ私は、文学をやる人間と話をしてもあまり発展がなく、かえって関係のないような人と話すときに思わぬ発見をすることがあります。

先日、日本橋高島屋近くにあるおすし屋の主人と対話





適りをよくすることなんか』

星の王子さまの作者サンテグジュペリは、六つの性格をもっていると思います。男らしくて、けなげで、おくびょうでうんと考えこんでいるかと思うとこにこするとうように。その六つの性格の更に深いところにもうひとつ大きなものがあるのですが、それをどう言いあらわそうかと考えたあげく、忪があるということばを見つけました。この忪というのは、日本製の漢語だそうです。日本製の漢語というのはいらないですね。

日本人には万葉の昔からすぐれた感覚があります。象徴詩は、フランスの専売のようにいつていますけれども、あにはからんや、万葉の歌人がちゃんと象徴していますし、また色彩聴覚についても同様です。このようなすぐれた素質が日本人にはあるのに、日本語が乱れてくるというのはことばかけが悪いです。これでは皆がよほど苦勞しないと、日本語というのはめっちゃめっちゃになってしまう。教科書にいろいろな文章があります。これはみんな口語文ですから、あれを口語に直す練習をするのも一つの方法でしょう。そうしたら私は、そこから日本語をよくする道が開

けてくるだろうと思います。

標準語というのを皆さんはどうお考えになりますか。アウンサーのしゃべることを標準語だと言う人もありますけれど、私はあれを聞くときとギョッとします。どのアナウンサーがしゃべっても同じことで大変良く似ています。しかしあれでは、ちょっともしゃべっている人自体が生きてきません。標準語というのはそれではいけません。

長谷川如是閑さんが何かの座談会のように、標準語というのは何だかわからない、それより皆のお手本となることばといった方がいいですねといわれたことがあります。私はこれに大いに同感しました。皆のお手本となることば、……いいですね。そして考えてみると、今の日本にはありませんね。これは、よってたかつて皆がこれから作ることばです。それでこそ皆のお手本となるのであって、いつできるかわかりません。わかりませんが、あまりあせらずにお手本を作るような気分をつくることです。気分ができたら、自然にそういうふうになってくるのではないでしょう。日本ではまだまだそこまで到達してはいません。それから、女の人の「あのね」、「ええと、何でしたかね」と





も楽しくなるでしょう。

フランスでは、このようなことばをフランス語にするのに誰が気をつけたかと言いますと、それは女の人です。女の人が先に立って、男の人のことばを直すような方向にもっていったのです。まずはじめは、家庭の中でのものの言い方から。そしてそういうことから家庭がよくなり、社会全体がよくなっていくでしょう。私たちも、ひとつくふうしていこうではありませんか。

ここで、声のことばについてお話しておきましょう。声のことばについて発声。発声は音楽と同じことです。歌を歌うときには、伴奏があるとしても歌いやすくなりますが、話すときもこれと同じであることを、私は経験から知りました。話すときに伴奏があると、とても話がうまくいくということを発見したのです。

話がうまくいくための伴奏ですから、楽器のみならず、自然な楽器である喉も、また伴奏になるということを私は実行しています。

大学でゼミをやっているとき、疲れてくると誰かに歌を歌ってもらうのです。そうすると、話をするのに非常に気

持がよくなる。

これから通じて、しゃべることはやはりひとつの音楽であるという感覚がでてきます。音楽と同じように、高さ、速度、強さがあり、これが決まるとあとは適当に間をつくる。そしてことばとなるのです。間というのは大切です。間のないずらした話は、ちっともおもしろくありません。こういうことから考えると、ものをいうということとは音楽になる。最も自然な音楽ではないでしょうか。そういう意味で、発声の訓練をする必要があると思うのです。

万葉の歌人は、まず声でうたうことからはじめました。万葉のことばというのはあとではありませんか。声のことばを大事にしなければ、何事も成り立たないということを忘れてはなりません。また勘所をおさえるということも大切です。生きた文学をやる人間は、これから素人といっしょにならなければいけません。街の一隅にも、文学者はいます。だから油断はできません。

(文責編集部)